

過去に学び、未来に繋ぐ

沖縄県立読谷高等学校三年 名渡山 海里

あの大戦から今年で七十五年。過去のあの記憶を、悲しみを、事実を、私たちは受け継いでいるのでしょうか。私たちは、バトンを受け継ぐ準備はできているのでしょうか。

二年前に起きた少年らによるチビチリガマ荒らしはまだ記憶に新しいのではないのでしょうか。ガマ荒らしという行動に加え、犯行に及んだのは少年たちで、肝試し感覚で行ったという事実には大きな衝撃が走りました。私は、長らく行われてきた平和教育の不十分さが浮き彫りになって現れた出来事だったと感じます。あの大戦やチビチリガマについて知っていれば、彼らはきつとガマ荒らしなどしないし、できなかったはずで
す。実際に彼らは

「歴史を知らずに過ちを犯してしまった。」

と述べています。知らぬが故に起こった悲劇です。そして、この悲劇は誰でも起こしうるのです。

去年の六月、広島から教育実習の先生が私のクラスに来ました。先生が行った授業で、私は自分の無知を自覚することになります。授業内容は、広島に投下された原爆について議論するもので、原爆投下についてそれぞれ肯定派、否定派にわかれて相手を説得するという内容でした。小学生の頃から平和教育受けている身、こんなこと簡単だろうと高を括っていました。しかし、その思惑に反し、説得はおろか議論すらままなりません。立場を変えても、やはりなぜだかうまくいきません。周りを見渡すと、皆同じ様子で苦勞していました。そんな私たちに先生はこう言いました。

「あなたたちは知らなすぎる。知識が無いから、議論ができない。」

その時、二年前に起きたチビチリガマの事件と、少年たちが頭をよぎりました。私はニュースを見たとき、正直少年たちを軽蔑しました。知らないで済まされることじゃないし、ありえないことだとも思いました。しかし、私も、私たちも彼らと一緒に、過去の出来事を知らないのです。本質的には彼らと一緒になのです。それに気付いたとき、遠くに感じていた彼らを一気に近くに感じました。

平和教育は、良くも悪くも定番化し、いわば恒例イベントと化しているように感じます。そして、その内容は感情に訴えることだけで終わっ

ているのではないのでしょうか。感情に訴えることももちろん大事ですが、その次のステップである、知る、に行きつかなければ平和教育とは思えません。思い返してみれば、私が受けていた平和教育は感情に訴えかけるものが主だったような気がします。毎年この時期になると、戦争に関するビデオや映画を見て、

「戦争は怖い。酷い。戦争はダメ。」

というありふれた感想で終わり、史実を知ることはありません。例外はあるかもしれませんが、多くの平和教育の実態はこのようなものではないのでしょうか。加えて、日本における平和教育は、被害者目線での教育になりがちです。加害者として日本が行ったことも、被害を受けたことと同様に学ぶべきです。戦争は空から降ってくる天災などではなく、そこに至るまでに確かな道筋があり、その奥にはきつかけや理由、背景が存在します。その核心に触れ、同じ道筋を二度と辿らぬように知り、考える必要があります。

「過去をより遠くまで振り返ることができれば、未来もそれだけ遠くまで見渡せるだろう。」

かつての英国の首相ウィンストン・チャーチルの言葉です。全くもってその通りです。どうして起こったのか、なぜ回避できなかったのか。過去を見渡し、その事実を踏まえてどう行動するかを考える。これが平和教育と呼べるものではないのでしょうか。

私は、沖縄戦はまだ終わっていないと思います。あの戦をきっかけに、この島にはフエンスが張り巡らされました。一部の米兵による暴行事件や米軍機の墜落事故、環境汚染など、未だ問題は絶えません。戦争による被害はその時だけのものではありません。どれだけの時を経ても、その傷は深く絡みつきます。沖縄はその証明です。捨て石として時間稼ぎになった沖縄。そんな沖縄だからこそ、日本が諸外国を傷つけてしまった事実を学ぶべきです。その姿勢が、平和を形作る大きな一歩となるはずです。

悲惨な過去を持つこの島は、世界に平和とは何かを問いかけることのできる、数少ない重要な場所です。その傷から織りなす未来は、きつと平和な世界に貢献できるはずです。

私には、生まれ育ったこの島で教師になるという夢があります。実際に体験した人たちから話を聞く機会が無いであろう子や孫の世代に、沖縄戦のことを受け継いでいける、そんな人になりたいです。教師を志す者として、この島で生まれ育った者として、無知に甘えることなく、少しづつでも史実を知っていきたいと思います。沖縄戦を風化させてはならないという責任と、その役割を担うのはこれからの私たちだということを自覚し、バトンを繋げるように行動していきたいです。